

修士論文研究計画

文学研究科 歴史学一年 磯村 翔 平

私は卒業論文において、春秋・戦国期の思想家である墨子の思想と、彼の思想集団である墨家の興亡について述べた。

墨子および墨家の思想に関する先行研究は、思想そのものを対象とするもの、墨家の書『墨子』を対象とするもの、あるいは思想家に関するものなど幅広い。しかし、墨家の当該時代における実態に關しては、これを伝える史料そのものが少なく、勢い墨家集団の動向に関する研究は余り進んでいない。私は、このような研究動向を踏まえ、墨家という集団が歴史上いかなる活動を行い、当該時代においていかなる意義を担ったのかを明らかにしたいと考えている。そのような観点から、修士論文では墨家と政治との関わりをテーマに採りあげるつもりである。ただ、現状ではテーマ設定が漠然としており、考察の対象を絞り込む必要を感じている。そこで、現在の問題意識の原点となっている卒業論文に立ち返り、卒論作成時点で今後の課題として残していた下記の問題点の考察から研究を始めたかと考えている。

- ① 墨家が滅亡したという確たる証拠はあるのか。（「絶学」という表記はあるのか）
- ② 墨子および墨家は他学派からどう見られていたのか。
- ③ 墨家集団における「約」とはどういったものなのか。

④ 墨家の分裂期と鉅子の継承に関する疑問。（「鉅子・孟勝、田襄子の集団の形成期は何時か。鉅子の継承者は何人か。」）

⑤ 書物『墨子』にある墨子の思想内容（十論二十三篇）は、なぜ「上・中・下」の三部構成なのか。

これらを踏まえて、以下の三項目を今後の作業に設定して考察を進めている。

- 1、墨家に関する史料を収集し、政治との関わりを示す内容や彼らの活動範囲を特定していく。
- 2、墨家集団の構成員・規則・事業などの実態を『墨子』等から探っていく。

3、先述した疑問点に関する先行研究を読み、自分なりの解答を引用されている史料から見出していく。

現在、第一項目に関して研究を進めており、正史以外の史料、主に『呂氏春秋』に記載される墨子および墨家の史料を収集し、彼らの活動範囲と政治に関わる事例を探るべく、引用文の表を作成している段階にある。また、『孟子』や『荀子』などの他学派の史料も同様に表を作成し、上記②の答えを見出していこうとしている。

最初に、現段階での墨家と政治との関係として挙げられる最も詳細な史料は、『墨子』公輸篇の「救宋説話」と『呂氏春秋』離俗覽・上徳篇に見られる「孟勝事件」、そして『呂氏春秋』の諸篇に見られる「入秦した墨者」の記述があり、これらを中心として研究を進めている。

そこから見出せる見解は先行研究と重なる部分もあるが、「救宋

説話」では、墨家が守護集団として活躍し、小国防衛に尽力し、禽滑麓という開祖の次期継承者であろう人物が存在すること。そして、三百人以上もの弟子がおり城郭の防衛に努めたということが見られる。ちなみに、この説話の年代は特定できていない。

二番目に、「孟勝事件」については、墨家は鉅子という人物を中心に集団を形成し、ここでは自身が仕える君主と契約を交わし、その土地を防衛していたことが窺える。だが、その契約が不履行に終わった場合、鉅子を始めとして集団自決を行い、死を以て償ったことがわかる。また、鉅子の継承は前鉅子の伝達によって伝えられたが、前鉅子と弟子との間の信頼関係が強く、新鉅子の命令を前鉅子の弟子が拒む状況が見られる。従って、この内容から当時（前三八一年）の墨家が、前鉅子の集団と新鉅子の集団の二つのグループを形成していたことが窺われる。

最後に「入秦した墨者」に関しては、法家的思想が浸透した秦国において、秦の法よりも、鉅子を中心とする集団内の規律（墨者之法）を重視できるほどの権限を持っていたこと。また、既に秦に入った墨者とこれから入ろうとする墨者とが互いに排斥しあう状況も見られる。故に、この時期（前三三七―三一）の墨家もまた秦の国内外の少なくとも二つ以上の集団を有していたことが窺える。以上が現段階における史料から読み取れる見解であり、今後は更に事例の幅を広げ、且つ上記の手順に沿って、題目決定に繋げていきたい。